

Title	ウガリト語の讃歌に見られる大型のネコとしてのアシュタルト
Sub Title	Ashtart as a big cat in the Ugaritic hymn
Author	小板橋, 又久(Koitabashi, Matahisa)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.2/3 (2022. 5) ,p.119 (249)- 130 (260)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220500-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウガリト語の讃歌に見られる

大型のネコとしてのアシユタルト

小板橋 又 久

はじめに

アシユタルトは、前二千年紀から前一千年紀にかけて地中海レヴァント地域で幅広く立証されている女神である。旧約聖書の中では、アシユタルト (*‘ashtarot*, *‘ashtarōt*) は、バアルと共にヤハウエ信仰からすると糾弾すべき外国の神である (士師記 21:3-14:106; 一サムエル 記 7:4:1210)。筆者は既に、ウガリト語文書に見られるアシユタルトについて論じたことがあった (小板橋 二〇一二)。二〇一一年と二〇一二年に、アシユタルトをめぐる国際会議が「変容、置き換え」という中心語をもって、東京とアムステルダムで開かれた。⁽¹⁾ この二つの国際会議の発表の中で、ウガリトのアシユタルトに関して注目したい発表は、スミスとシュミットの発表であり、

彼らの発表は論文として公開されている。スミスは、後期青銅器時代シリアのテキストの中で、アシユタルトとの関わりのあるあらゆる可能性を議論している (Smith 2014)。また、シュミットは、テキストと図像資料から見ると、後期青銅器時代のアシユタルトの第一の役割は戦争と厄払いの呪術、治療の女神であり、前一千年紀には、彼女の好戦的な性格は明白でなくなり、王権と結びついた女神の性格が見られるようになるとしている (Schmitt 2013; Schmitt 2014)。

二〇〇七年に公開されたウガリト王の夏の宮殿と考えられるラス・イブン・ハニ出土の「アシユタルト讃歌」 (RIH 98/02)⁽²⁾ の中では、アシユタルトは、「大型のネコ」と形容されている。これまでのウガリトのアシユタルト研究では、「大型のネコ」としてのアシユタルトに

ついで、詳しく議論されてこなかった。本稿では、後期青銅器時代のウガリトにおいて、アシュタルトが「大型のネコ」と呼ばれた社会文化的な意味を、古代近東の関係する資料と比較しながら考察してみたい。

一 呪術力を持ち、王を守るアシュタルト

1 ウガリト語の神話・祭儀文書に見られるアシュタルト

ウガリト語の神話・伝説の中で、アシュタルトは度々出てくる神ではないが、ウガリト語の祭儀文書の中ではしばしば現れる。アシュタルトに対してワインや羊、その他何らかの奉納が行われたことが幾つかの文書から知ることができ⁽³⁾る。また、「アシュタルトが王の家に入る(*trb 'irt bt mlk*)」(KTU³ 1.43:1-2, 1.91:10, 1.148:18)という記述があり、アシュタルトの神像が移動する儀式があった。マリの死者供養の儀礼である *kisnu* との比較により、KTU³ 1.43 におけるアシュタルトは、*kisnu*-型の儀式と関わっている可能性⁽⁴⁾がある。

蛇の毒に対する呪術を伝えるウガリト語の文書の中で、アシュタルトはアナトと対で、その名前が呼ばれている(KTU³ 1.100:19b-20a, 1.107: 39b-40a)。KTU³ 1.107:

39b-40a の中では、他の神々と共に、アナトとアシュタルトが蛇の毒を集めるように呼びかけられており(*ni w. 'irt [il]šp. lmd*)、ウガリトのアシュタルト神は、蛇の毒の治癒に関する呪術と関わっている。

ウガリト語のキルタ伝説の中では、アシュタルトは呪術の神ホロンと共に、呪いの文脈で現れる(KTU³ 1.16: VI:34-5⁽⁵⁾)。

「ウガリト語文書・キルタ伝説」KTU³ 1.16:VI:34-57

「砕くように、(五五)ホロンが、おお、わが息子、砕くように、ホロンが、(五六)あなたの頭を、

アシュタルト、バアルの名前が、(五七)あなたの脳天を。」

キルタ伝説の文脈において、バアルの側に立つ存在であるアシュタルトは「バアルの代理人」としてキルタ王の為に破壊的な力を行使すると考えられる。

2 エジプト、フェニキアにおけるアシュタルト

エジプトでは、アシュタルトは、バアル、レシエフ、ホロン、アナト、ケデシウトと共に、新王国の始めにエ

ジプトに導入された⁽⁶⁾。ラメセス三世時代（前一一八四—一一五三）のレリーフの碑文によると、アシュタルトはアナトと共に「彼（ラメセス三世）の盾」と呼ばれており、軍事的な意味で王を支えた女神であった⁽⁷⁾。メンフィス由来の呪文を記したパピルスからは、アナトと共にアシュタルトは、「血と毒を引き抜き出す」ことに関わっており、病気を治す女神であったことが分かる⁽⁸⁾。

アシュタルトは、ティルス、シドン、サレプタなどのフェニキア人の都市で崇拜された女神である⁽⁹⁾。前五世紀のシドンの王タブニトの墓碑に見られるように、シドンの王はアシュタルトの祭司（*kin šrt*）であり、アシュタルトはシドンの都市神であったと考えられる。タブニトの墓碑の中では、「そのこと（石棺を開き、タブニトの眠りを邪魔すること）は、アシュタルトの忌み嫌うことだからである」（*tbl šrt hdyr*）（KAI 1336）と書かれており、アシュタルトが呪いの文脈で現れ、王を守る女神であることが分かる。また、アケメネス朝、ヘレニズム時代のフェニキアの船乗りの宗教において、アシエラ、アシュタルト、タニトは、船乗りの水上世界の生存において重要な役割を果たした⁽¹⁰⁾。

「フェニキア語文書：シドンの王タブニトの墓碑」

KAI 13, Gibson 1982, 103, No. 27, Pl. III-2

（一三）私、タブニト、アシュタルトの祭司⁽¹¹⁾、シドン人達の王、アシュタルトの祭司、シドン人達の王エシュムン・アザルの息子が、この棺の中に横たわる。

（三一八）あなたが誰であれ、この棺を見つけた者は誰でも、決して決して私の上にある物を開けてはならないし、私を煩わしてはならない。というのも、彼らは私のために銀を集めなかったし、私のために金もあつめなかったし、豊かな物は何でも（私のために彼らは集めなかった）。私だけがこの棺の中に横たわる。決して決してあなたは私の上にある物を開けてはならないし、私を煩わしてはならない。何故ならば、そのことはアシュタルトの忌み嫌うことだからである。もしあなたが実際に私の上にある物を開き、私を本当に煩わしたとするならば、あなたに子孫はないであろう、生きている間に、日の下で。また死者の霊達と共に横たわる場所も（あなたにないであろう）。

エジプト語とフェニキア語の資料から、アシユタルトは、呪術的な力を持ち、病の治癒に関わり、王を守る役割を果たした女神であることが考えられる。

二 大型のネコとしてのアシユタルト

1 ウガリト語の讃歌に見られるアシユタルト

ウガリト語の神話文書からは、アシユタルトが狩人として描かれることが分かる。アシユタルトが現われる一つの神話テキストから (KTU³ 1.92)、「アシユタルト、狩人」(*yrt suad[ti]*) (二行) が、荒野を行き (*lke b mdr*) (二行) 槍をつかみ (*mwh. h[ti].d[...]*) (二行) おそらく獣を倒して、エルヤ (*tr abh il. t[rm]*) ヤリフ (*zslm yhl*) などの神々に食べさせる一 (一五—一六行) ことが読み取れる。ウガリト語の文書には「野のアシユタルト」(*yrt. sz*) が現われるが (KTU³ 1.91.10: 1.146:18; 4.182:55)、「野」とはアシユタルトの活動領域、ないし属性を示していると考えられ、狩人としてのアシユタルトの活動領域、ないしは属性と関わりが考えられる。神々の酒宴を伝える神話テキストの中でも (KTU³ 1.114:22-23)、「アシユタルトはアナトと共に狩りに出かける描写がある」(*nt w' yrt. ksdn.*)。

ウガリト語の「アシユタルト讃歌」の中で、アシユタルトは「雌ライオン」「ヒョウ」と呼ばれており、「大型のネコ」と形容されている。⁽¹⁵⁾

「ウガリト語文書：アシユタルト讃歌」

KTU³ 1.180 (RH 98/02):15

(一) アシユタルトの名前が、声を出して歌われるように。

私は、雌ライオン (*ls*) の名を唱おう。

名前によって、「…」に対して彼女は勝利を得る。

(二) 彼女が撃つように、エルを攻撃するものがある。
こそ。

力強いヒョウ (*mm*)、アシユタルトは、

(五) 力強いヒョウ、飛び跳ねる。

ネコ科のライオンは群れをつくって生活しており、獲物は協力して狩り、多くは雌が実際に獲物を殺す。⁽¹⁶⁾ ネコ科のヒョウも肉食獣で、小型、中型の草食獣を捕食する。⁽¹⁷⁾ 大きなネコの雌ライオン、ヒョウはハンターである。「アシユタルト讃歌」からは、アシユタルトはヒョウの

ように動作が素早く、獲物を攻撃する恐ろしいハンターとして描かれている。ウガリトの人々はアシュタルトに何を求めたのか。

2 古代近東世界におけるライオンとヒョウ

ユーフラテス川中流域の都市国家マリから出土した文書（マリ文書）によると、マリ王ジムリ・リム（在位前一八世紀頃）に宛てた娘のキルーの手紙（ARMT X 35）の中では、ある人がライオンに食われたであろうこと、そのライオンは既に二人の女を食べたことが述べられている。⁽¹⁸⁾『ギルガメシュ叙事詩』の中では、ウトナピシシュティムの所へ行く道の途中で、夜、複数のライオン（URMAH. MES）と出会い、ギルガメシュは恐れた（*ga-luh₃ a-na-ku*）（George 2003: 666 IX 8-9）。メソポタミアの文献から、ライオンの毛皮、毛、頭などが、呪術的に用いられたことが分かる。⁽²⁰⁾

メソポタミアの文献から、ライオンが人を襲って食う恐ろしい動物であり、呪術に用いられたことが分かるが、ヒョウが宗教儀式に用いられたという記録は確認できない。⁽²¹⁾

ヒッタイトの儀礼文書からは、神の象徴と考えられる

銀のヒョウ（*PIRI₃ TUR KU₃ BABBAR*）と金のライオン（*URMAH GUŠKIN*）が、秋の大祭であるキ・ラム祭の中で定められた役割を果たしたことが分かる。⁽²²⁾キ・ラム祭の別の場面の中ではヒョウの皮や頭が儀礼で用いられ、儀礼の一場面で「ヒョウの仕方で踊る」場面もあった。⁽²³⁾

「ライオン人（*LU₂ HES URMAH*）」は、おそらく、ライオンの毛皮を身につけるか仮面を被り、儀礼で重要な役割を果たしたと考えられる。⁽²⁴⁾ハッティ起源の建築儀礼を伝える一つのヒッタイト語文書（KUB XXIX 1 II:41-46）⁽²⁵⁾によると、新宮殿の建設が述べられている儀礼の描写の中で、ライオンとヒョウの足（*si-si₃*）⁽²⁶⁾が儀礼に用いられている。

『ヒッタイト語文書：ハッティ起源の建築儀礼文書』

KUB XXIX 1 II:41-46

『*kenuš*: 容器を持つてこい。その中で、ライオン（URMAH）の（前）足をまどめよ（？）』ヒョウ（*par₂ ša-na-aš*）の（前）足（*u₂ ša-i*）を！それらをつかみ、それらを合わせて一つにしる。その人の胸の上にそれらを置き。王の魂がその胸の中で一つにされるように。』⁽²⁷⁾

kunbi-容器が災いを封じるために用いられる容器であることから、KUB XXIX が伝える儀礼の中で、ヒヨウはライオンと共に王の災難を封じる機能を果たしたと考えられる。

ヒヨウは断片的な医術文書 (KUB XLIV 61 Rs. (IV)) 14) の中にも現れ、ヒヨウ (PIRG₃-TUR) の「腱、肉」(*uz^u Samā*) が、呪術的な医術の中で薬材として用いられることがあったことが分かる。ライオンの体の一部も、病気に対する薬材として用いられた。⁽³⁰⁾

ヒッタイトの儀礼文書から、ライオンとヒヨウが祝祭やハッティ起源の建築儀礼の中で重要な役割を果たし、医術とも関わり呪術的な儀礼と結びつくことが分かる。しかし、何故ライオンとヒヨウが保護や災難除けの機能を果たしたかについて、アナトリアの文献からはよく分からない。

シュメール語のニンギシュズィダ讃歌の中で、冥界の神ニンギシュズィダは、「殺す狂暴なヒヨウ (*pirig-tur-ban₃-da*)、悪魔祓いをそらす激怒した蛇 (*muš-lu₅ tu₆ si₄-bi₄*)」(UET 6, 70, 4) と形容されている。⁽³¹⁾ アッシリア王アッシュル・ナツィルパル二世 (前八八三—八五九) の碑文の中で、王は「私はガゼル、鹿、熊、ヒヨウ

(*ni-in-ri ME₅*)、*senkurru*-動物の群れなど野の獣の総てを、私の都市カルフに集めた。私は(それらを)私の国の総ての人に見せた。」(AKA 203 IV 37-48)⁽³²⁾ と誇らしく述べている。

シュメール語とアッカド語の文書から、ヒヨウは荒野の動物の一つであり、人間が捕らえることが困難な恐ろしい獣であることが分かる。

一方、旧約聖書の預言書の中では、ヒヨウがライオンと共に比喩表現の中で引用されており、ヒヨウは人間を襲い、人間をも噛み裂く人間にとって恐ろしい危険な動物であることが分かる。

【ホセア書137】

「わたしは彼らに対して獅子 (*sānān*) のようになり、豹 (*nāmer*) のように道端で待ち伏せる。」

【エレミヤ書5:6】

「そのため、森の獅子 (*aryeh*) が彼らを殺し、荒れた地の狼が彼らを荒らす。

豹 (*nāmer*) が彼らの町々をうかがい、町から出る者をみな噛み裂く。

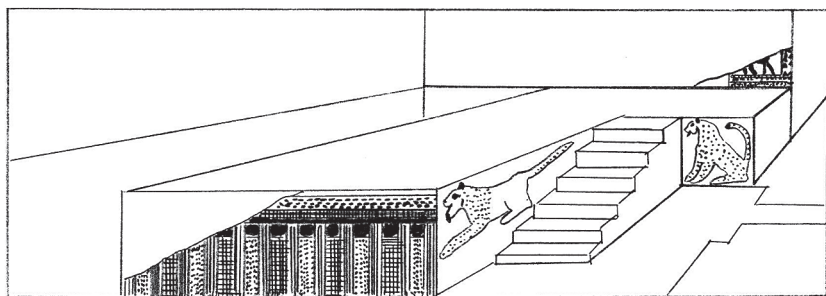


図1 アル・ウカイル遺丘の神殿基壇 (Nys & Bretschneider 2007, 599, Fig. 33 より作成)

彼らは背くことが多く、
その背信がすさまじいからだ。」

(引用したのホセア書、エレミヤ書の翻訳は
『聖書 新改訳 2017』による)

ライオンの護符は、初期シムール時代からメソポ
ミアで用いられており、ライオン像は紀元前三千年紀か
ら紀元前一千年紀にかけてメソポタミア、シリア、アナト
リアにおいて、都市や神殿、宮殿の門に設置されている⁽³³⁾。
バビロンの北に位置するアル・ウカイル遺丘の神殿基
壇には、ヒョウが描かれている(前四千年紀末)⁽³⁴⁾。
また、メソポタミアのウルクのアヌのジググラトの三層
からは定礎物として若いライオンとヒョウの骨が、切断
された足とともに発見されており(前三四五〇年頃)⁽³⁵⁾、
ウルクの神殿D IV aで発見された定礎物の中には、大型
のネコ科動物の前足が含まれていることから、メソポタ
ミアの人々がヒョウを含む大型のネコに呪術的な保護と
支えを求めたことが分かる。

メソポタミアとアナトリアの考古学的資料から、ブラ
ウン・ホルジンガーは、ライオンは最強の動物としてし
ばしば描かれる一方、強奪獣として獣群の敵であり、彼

の畏敬を生じさせる外見は、彼に同時に人間を守るための厄除けの力を与えていると述べている。⁽³⁷⁾

古代近東の文献と考古学的遺物から、恐ろしいハンターとしてのライオンとヒョウに、人々は呪術的な保護を求めたことが考えられる。

終わりに

ウガリト語の「アシュタルト讃歌」から、敵を圧倒する力を持ったアシュタルトは、ライオンやヒョウのようなハンターであることが分かる。古代オリエントの資料から、恐ろしいハンターとしてのライオンとヒョウに、人々は呪術的な保護を求めたことが分かる。エジプトのファラオやシドンの王がアシュタルトに保護を求めたように、恐ろしいハンターである大型のネコと形容されるアシュタルトに讃歌を捧げる儀式の中で、ウガリトの王は王家に対する呪術的な保護を求めた可能性がある。「アシュタルト讃歌」は、このテキストが出土したラス・イブン・ハニで、「アシュタルトの歌い手 (*sr. l'rt*)」(KTU³ 4.1684) によって歌われたのかもしれない。

註

- (1) 二〇一一年八月、東京の慶應義塾大学において、杉本智俊氏の主催により「イシュタル・アシュタルテ・アフロディテに関する国際会議」が開かれ、そこで発表された研究は、「女神の変容 イシュタル・アスタルテ・アフロディテ」として公開されている。この会議の内容の報告については、田澤二〇一、Suginoto 2014を参照せよ。また、二〇一二年、オランダのアムステルダム大学において、M・A・クリスチャンとR・シュミットの主催で開かれた「アシュタルテの置き換え (Permutation of Astarte)」と題する国際会議で発表された研究は、*Die Welt des Orients* 43/2 (2013) にまとめて公開されている。アムステルダムの国際会議の内容の一部については、Cristian & Schmitt 2013を参照せよ。

- (2) テキストの公開は、パーディによって行われている。

Pardee 2007.

- (3) 「*野* アシュタルトに」(*qlt. l. l'rt. šld*) (KTU³ 1.4816) 「*ndrg* のアシュタルトに」(*abqr* のアシュタルトに) (*l. l'rt. ndrg l. l'rt. abqr*) (KTU³ 1.81:15-19) 「*フイン* がフリのアシュタルトに」(*yn. l' l'rt l'rt*) (KTU³ 1.11213) 「羊がアシュタルトに」(*l'rt. š*) (KTU³ 1.1487)

- (4) 小坂橋 二〇一二、五五頁。

- (5) このテキストに関する文献学的議論については、小坂橋 二〇一二、五八―五九頁を参照せよ。

- (6) Tazawa 2014, 103.

- (7) Tazawa 2009, 21.5 Doc. 9, 10, 14, 33.

- (8) *Ibid.* 80, Doc. 27.
 - (9) 主に、考古学的資料から見たフェニキアのアシュタルト崇拜に関する最近の研究については、Bloch-Smith 2014を参照せよ。
 - (10) Christian 2013, 181.
 - (11) タブニトの父、エシウムンアザル一世は前五世紀に年代づけられるので、タブニトの治世は前五世紀の第二四半期であったと考えられる。タブニトの息子のエシウムンアザル二世の碑文からすると、エシウムンアザル二世は父の死後生まれたことから、タブニトの治世は短く終わったと思われる。エシウムンアザル二世は幼くして即位したため、母親のウツミアシュタルト (*mišrt*) が摂政として実権を握っていたようであり、エシウムンアザル二世自身も一四歳の若さで亡くなった。McCarter 2000, 182, n.1; Gibson 1982, 105-109.
 - (12) アシュタルトはシドンにおいてバアル、エシウムンとともに主要な神の二柱であった。タブニトは王であると同時に女神の祭司長として、聖職者の務めを果たしたと考えられる。Gibson 1982, 103, n.1.
 - (13) KTU³ 1.92 に関する研究は、次の研究を参照にせよ。
Herrmann 1969; Sammartin 1977; Moor 1986; Caquot & Tarragon 1989, 31-36; Margalit 1989; Dijkstra 1994; Wyatt 1998; Pardee 2008; Smith 2014, 46-49.
 - (14) *ibid.* [...] の読みについては、Pardee 2008, 14 に従った。
 - (15) このテキストに関する文献学的議論については、小板橋 二〇二二、五九一六〇頁を参照せよ。
- (16) 「ライオン」『ブリタニカ国際大百科事典』6、ティビーエス・ブリタニカ、一九九三年、六八二頁。
 - (17) 「ビョウ」『ブリタニカ国際大百科事典』5、ティビーエス・ブリタニカ、一九九三年、四七八頁。
 - (18) *DEPM* III, 439.
 - (19) 日本語訳については、月本 一九九六、一〇六頁を参照せよ。
 - (20) Heimpel 1987-1990, 83.
 - (21) Heimpel 1980-1983, 600; CAD N-II, 234-235.
 - (22) Haas 1981, 107.
 - (23) *Ibid.* 108.
 - (24) *Ibid.* 1987-1990, 86.
 - (25) テキスト校訂は、Schwartz 1947を参照。
 - (26) ヒッタイト語 *sisan* の意味は、問題である。幾つかの解釈が提案されてきた。‘meat’ (Schwartz 1947, 33) ‘Zahn (?)’ (Friedrich 1952, 194, ‘tail’ (Goetze 1969, 358) ‘シカゴ大学のヒッタイト語の辞書による’) ‘(a body part characteristic of certain animals: tail or paw ?)’ という説明がなされている。CHD S, 449. 文脈からライオンとビョウの体の一部であることは確かである。ウルクのアヌのジグuratの皿層で発見された定礎物として若いライオンとビョウの骨が、切断された足とともに発見されている。UVB 8, Taf. 43. さらにウルクの神殿DのIVaで発見された定礎物(前三五〇〇年頃)の中には、大型のネコ科動物の前足が含まれている。Lenzen 1974, 126; Williams-Forte 1980-1983, 603. ウルクの神殿の定礎

物との比較から *šišai* が「足」を指す可能性もある。

šišai ち *šišai-i-šiši* 'to imoreš' とらへ動詞から派生したものとみられる。Kloekhorst 2008, 757-758. ローマン語の *šišai* の解釈については、ロンドン大学のマーク・サマーデン博士から詳しい教示をうけた。

- (27) KUB XXIX 1 II.39-46 の釋語については, Schwartz 1947, 30-33, Goetze 1969, 358, Beckman 2010, 74 を参照。
こゝに。

- (28) Pulvel 1997, 154.
(29) Ünal 1980-1983, 605; Burde 1974, 20-21, 23. KUB XLIV 61 Rs. (IV) 14-18 の解釋については、トーマス・ハルツ博士の早田大輔博士の教示をうけた。
(30) Ünal 1987-1990, 87.
(31) Heimpel 1968, 331.
(32) AKA 203 IV 37-48 の釋語については、その大輔を参照。
(33) CAD N-II, 234, Grayson 1991, 226.
(34) Braun-Holzinger 1987-1990, 89-90.
(35) Nys & Bretschneider 2007, 599, Fig. 33.
(36) UVB 8, Taf. 43.
(37) Lenzen 1974, 126; Williams-Forte 1980-1983, 603.
(38) Braun-Holzinger 1987-1990, 88.

参考文献

Block-Smith, E. 2014: "Archaeological and Inscriptional Evidence for Phoenician Astarte," in D. T. Sigmimoto (ed.), *Transformation of a Goddess: Istar---Astarte---Aphrodite*,

Fribourg, 167-194.

Beckman, G. 2010: "Temple Building among the Hittites," in M. J. Boda & J. Novotny (eds.), *From the Foundations to the Crevelations Essays on Temple Building in the Ancient Near East and Hebrew Bible*, Münster, 71-89.

Braun-Holzinger, E. A. 1987-1990: "Löwe B. Archäologisch," *RLA* 7, 88-94.

Burde, C. 1974: *Heitische medizinische Texte*, Wiesbaden.

Caquot, A. & Tarragon, J.-M. 1989: *Textes Ougrtriques: Textes religieux, rituels, Correspondence*, Tome II, Paris.

Christian, M. A. 2013: "Phoenician Maritime Religion: Sailors, Goddess Worship, and the Grotta Regina," *Die Welt des Orients* 43, 179-205.

Christian, M. A. & Schmitt, R. 2013: "Permutations of 'Astarte: Introduction," *Die Welt des Orients* 43, 150-152.

Dijkstra, M. 1994: "The Myth of Astarte, the Huntress (KTU 1.92). New fragments," *UF* 26, 113-126.

Friedrich, J. 1952: *Heitisches Wörterbuch*, Heidelberg.

George, A. R. 2003: *The Babylonian Gilgamesh Epic* Volum 1, Oxford.

Gibson, J. C. L. 1982: *Textbook of Syrian Semitic Inscriptions*, Vol. 3 Phoenician Inscriptions, Oxford.

Goetze, A. 1969: "Ritual for the Erektion of a New Palace," in J. B. Pritchard (ed.), *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*, Princeton, 357-358.

Grayson, A. K. 1991: *The Royal Inscriptions of Mesopota-*

- mia Assyrian Periods Volume 2 Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC I (1114-859 BC)*, Toronto.
- Haas, V. 1981: "Leopard und Biene im Kulte 'hethitischer Götinnen: Betrachtungen zu Kontinuität und Verbreitung altkleinasiatischer und nordsyrischer religiöser Vorstellungen," *UF* 13, 101-116.
- Heimpel, W. 1968, *Tierbilder in der sumerischen Literatur*, Roma.
- Heimpel, W. 1980-1983: "Leopard (und Gepard). A. Philologisch," in *RLA* 6, 599-601.
- Heimpel, W. 1987-1990: "Löwe A. I. Mesopotamien," in *RLA* 7, 80-85.
- Herrmann, W. 1969: "Astart," *Mitteilungen des Instituts für Orientalforschung* 15, 6-55.
- Kloekhorst, A. 2008, *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexikon*, Leiden.
- Lenzen, H. J. 1974: "Die Architektur in Eanna in der Uruk IV Periode," *Iraq* 36, 111-128.
- McCarter, P. K. Jr. 2000: "The Sarcophagus Inscription of Tabnit, King of Sidon," in W. W. Hallo & K. L. Younger, Jr. (eds.), *The Context of Scripture* Vol. 2, Leiden/Boston/New York, 181-182.
- Margalit, B. 1989: "KTU 1.92 (Obv.): A Ugaritic Theophagy," *Aula Orientalis* 7, 67-80.
- Moor, J. C. de 1986: "Athartu the Huntress (KTU 1.92)," *UF* 17, 226-30.
- Nys, N. & Bretschneider, J. 2007: "Research on the Iconography of the Leopard," *UF* 39, 555-615.
- Pardee, D. 2007: "Preliminary Presentation of a New Ugaritic Song to 'Attartu," in K. L. Younger Jr. (ed.), *Ugaritic at Seventy-Five*, Winona Lake, 27-39.
- Pardee, D. 2008: "Deux tablettes ougaritiques de la main d'un meme scribe, trouvées sur deux sites distinct: RS 19.039 et RIH 98/02," *Semítica et Classica* 1, 9-38.
- Puhvel, J. 1997: *Hittite Etymological Dictionary Volume 4 Words beginning with K*, Berlin/New York.
- Saunartín, J. 1977: "arby -vierjährig (KTU 1.92:10)," *UF* 9, 374-375.
- Schmitt, R. 2013: "Astarte, Mistress of Horses, Lady of the Chariot: The Warrior Aspect of Astarte," *Die Welt des Orients* 43, 213-225.
- Schmitt, R. 2014: "Astarte in Ugarit, Kanaan und Ägypt," *UF* 45, 509-524.
- Schwartz, B. 1947: "A Hittite Ritual Text (KUB 29.2= 1780/c)," *Orientalia* 16, 23-55.
- Smith, M. S. 2014: "Athart in Late Bronze Age Syrian Texts," in D. T. Sugimoto (ed.), *Transformation of a Goddess: Ishar---Astarte---Aphrodite*, Fribourg, 33-85.
- Sugimoto 2014: "Preface" in D. T. Sugimoto (ed.), *Transformation of a Goddess: Ishar---Astarte---Aphrodite*, Fribourg, VII-IX.
- Tazawa, K. 2009: *Syro-Palestinian Deities in New Kingdom*

- dom Egypt: The Hermeneutics of Their Existence*, Oxford.
- Tazawa, K. 2014. "Astarte in New Kingdom Egypt: Reconsideration of Her Role and Function," in D. T. Sgimoto (ed.), *Transformation of a Goddess: Ishar--Astarte--Aphrodite*, Fribourg, 103-123.
- Ünal, A. 1980-1983. "Leopard, C. In Kleinasien,," in *RLA* 6, 604-605.
- Ünal, A. 1987-1990. "Löwe, A. II Bei Hetiten,," in *RLA* 7, 85-87.
- Williams-Forte, E. 1980-1983. "Leopard, B. Archäologisch,," in *RLA* 6, 601-604.
- Wyatt, N. 1998. *Religious Texts from Ugarit: The Words of Ilmiku and his Colleagues*, Sheffield.
- 小坂橋又久 二〇一一:「ウガリト語の神話・祭儀文章に見られるアシタラル」『オリエンタル』第五五巻第二号、五三―六三頁。
- 田澤恵子 二〇一一:「アシタラル・アスタルテ・アフロシヤテに関する国際会議」『オリエンタル』第五四巻第二号、一一三―一八頁。
- 月本昭男訳 一九九六:『ギルガメッシュ叙事詩』、岩波書店。
- AKA: E. A. W. Budge & L. W. King (eds.), *Annals of the Kings of Assyria*, London, 1902.
- CAD: *The Chicago Assyrian Dictionary*, Chicago, 1956-2010.
- CHD: *The Hittite Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Chicago, 1980-.
- DEPM: J.-M. Durand, *Les documents épistolaires du palais de Mari*, I, II, III, Paris, 1997, 1998, 2000.
- KAI: H. Donner & W. Röllig, *Kanaanäische und aramäische Inschriften*, I-III, Wiesbaden, 1964-1968.
- KTU³: M. Dietrich, O. Loretz & J. Sanmartin, *The Cuneiform Alabetic Texts from Ugarit, Ras Ibn Hani and Other Places*, Münster, 2013.
- KUB: Keilschriftkunden aus Boghazköi.
- RIH: Ras Ibn Hani.
- RLA: E. Ebeling u. a. (Hrsg.), *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*, Berlin, 1928-.
- UET: Ur Excavations, Texts.
- UF: *Ugarit-Forschungen*.
- UVB: Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Jahrg. 1936, Phil.-hist. Klasse, Nr. 13. Achter vorläufiger Bericht über die von der Deutschen Forschungsgemeinschaft in Uruk-Warka unternommenen Ausgrabungen von A. Nöjdeke, A. von Haller, H. Lenzen und E. Heinrich.

聲明